

各組合・地域労連・各団体 御中

青森県労働組合総連合

TEL 017-762-6234、FAX 017-729-2186

メール ao110@kenrouren.jp

【発信者】事務局長 有馬美恵

3/26 第5弾の報告 奥村議長が岩手県労連入り。握手を交わし、宮古市と田老町へ。「防災の町」は瓦礫の山だった・・・

3/27 第6弾は宮城県労連にかハんと灯油、米を届けます！

3月26日（土）午前7時に青森を出発し、岩手県へ3名で向かった。拠点の盛岡の「いわて労連」の事務所で秋田県労連と集結し、握手を交わしながら、秋田県労連は釜石へ、我々青森県労連は、宮古へ向かった。秋田県労連のトラックからは、リンゴがのぞいていた。

宮古では、拠点となっている宮古民主商工会の事務所へ行き、避難所となっている市内の宮古小学校と山口小学校に支援物資を届けた。まだ2～3歳の幼児が何も知らない様子で走り回っていたが、避難民はいずれも堅い表情で笑顔はなかった。避難している体育館は、避難家族の仕切りもなく、物が無いだけではなく、もう2週間にもなるのに、プライバシーもない中で生活を余儀なくされている苦難が想像された。

宮古から45号線を北上し、旧田老町（現宮古市田老地区）へ向かった。宮古市の駅前商店街の道路には、漁船が横倒しとなって、今も放置されて、住宅は横倒しとなってつながっており、津波のすごさを改めて実感した。しかし、そのすごさの実感は、田老に入り、驚愕へと変わった。昭和8年の三陸大津波を教訓に作られた、日本最の防潮堤（高さ10m）。その後の津波にも耐え、「防災の町田老」と言われたその防潮堤を越えて押し寄せてきた津波が、数分で田老の町を飲み込んだ。防潮堤の内側にあったはずの町が、更地になっている。町だったということがわからないのである。いくつかのコンクリートの建物以外は、すべて崩壊して土台だけが残り、その上に泥が堆積していた。道路も全く見えない。ちょうど、台風の後大量の漂着物が流れ着いた砂浜のようであった。

ただ一つの希望があった。それは敵対的にされ乾燥した現代社会において、立場を越え、全国から多くの支援隊が駆けつけ、支援物資が集まり、互いに「ありがとうございました」言葉が心の底から発せられていることである。この報告を書きながら、量を控えていた酒を、 tonightは深く飲みたい心境にかられている。（奥村）

「ガソリン、衣類、食料が足りない」と宮古市のみなさん



津波は堤防を軽々と超え町を破壊した

